二条院ノ讃岐（さぬき）

杉本苑子

中公文庫

中公文庫

二条院ノ讃岐

定価はカバーに表示してあります。

1985年11月10日初版
1996年12月20日10版

著者　杉本苑子

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1985 CHUOKORON-SHA,INC. / Sonoko Sugimoto

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-201269-4　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

二条院ノ讃岐

杉本苑子著

中央公論社

表紙・扉　白井晟一

目次

讃岐について語る第一の女　待賢門院ノ美濃　7
讃岐について語る第二の女　紀伊ノ二位朝子　60
讃岐について語る第三の女　大宮ノ小侍従　119
讃岐について語る第四の女　神崎の遊女、瑠璃光　164
解説　神谷次郎　233

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

二条院ノ讃岐

讃岐について語る第一の女

待賢門院ノ美濃

わたくしは叔母ではありますけれど、あの娘のことをくわしくはぞんじません。どことなく影の薄い、陰気な子供だったというほか、はっきりした記憶がないのでございます。

今にして思い返せば、この、居るか居ないかわからぬのに、じつはそこに居て、自身の欲するほうへ、じりじりと流れを変えてゆく芯の強さ、執念の深さこそが、

（あの娘の、もっともあの娘らしい特色であった）

と、うなずけもするのですけど、当時はまだ、わたくしは若く、相手も幼かったために、ごく淡い、通りいっぺんの触れ合いしか、おたがいの間に生まれませんでした。

だれもがそうでしょうが、わたくしも十代の終りに夫を持ち、ほんの二、三年の共棲みの

あげくその夫に死なれて、待賢門院さまのおそばへ宮仕えにあがるといったごたごたつづきの中で、わが身ひとつの始末にかまけ切っていた明けくれだったのでございます。

ようやくどうにか女房勤めに馴れ、気持の落ちつきも得られるようになったころ、宿さがりを許されて兄の屋敷へもどってまいります折りふし、わたくしは廊の隅、庭の遣り水のほとりなどで、一人遊びをしているあの娘の姿を見かけることがございました。

いかにも淋しげなので、つい、そばへ寄って、

「まろや、何をしているの？」

話しかけたりいたしますと、ギクと色を変えて立ちあがり、まるで悪事でも咎められたようなうろたえ方で、そそくさ簾の内へ逃げこむのでございます。

しゃがんで見ていたものを何かと思えば、芋虫の死骸を運んでゆく蟻の行列だったりして、他愛はないのですけれど、遊び友だちを持たぬ少女が、所在なげにそのようなものをみつめていることじたい、哀れでした。

家の中へ隠れても、簾のすぐ向こう側にひそんでこちらを窺っているのは、童髪の透き影でわかります。

「なぜ逃げるの？　わたくしを忘れたわけではないでしょう？　あなたの父さまの、いちばん下の妹ではありませんか。あなたがまだ、いまよりもっと小さな赤ちゃんだったころ、抱っこしたり、襁褓を替えてさしあげたりしたこともあるのですよ」

わざとこころ安げに庭から声を投げても、返事をしません。

そのくせ、たまさか帰ってくる若い叔母に興味はあるのでしょう、息を詰めて佇ちつづけている気配が、可愛げのない、どこやら頑な印象に思えるのでした。

顔だちは、けっして醜くないのです。五ッか六ッにしては大人びて、ちんまりと調った、むしろ臈たけた子柄でございました。

難を言えば髪の嵩がやや少く、夕近い日ざしを斜めに受けたりすると、茶がかって見えることでしょうか。

眸の色も同様、光のあたり具合で菫色に見えるのです。

色は抜けるほど白く、紅をさしてもいないのに唇が赤くて、紅梅の莟でも咥えたような感じでした。

（髪はまだ産毛の域を出ていないのだ。成長するにしたがってもっと量が増し、色もつやつやと黒くなるにちがいない）

わたくしはそう思っていましたが、まわりで何やかや、脅したり誹したりする者もいるらしく、当人は髪の色と目の色を、そのころからもう、ひどく気にしていたようでございます。

それと、いま一つ、母親がいないこと……。まろやの様子が暗く、淋しげなのは、そのせいだとわたくしは見ていました。

ですから、そんな偏屈者の姪が、十年たった今、守仁皇太子の御所に奉公にあがり、太子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

のご寵愛を蒙って、『二条院ノ讃岐』の女房名で呼ばれるようになったと聞いたときは驚きもし、しんそこわたくしは、よろこびもしたのでした。

讃岐はしかも、父親の血すじを享けて、

「歌の上手」

とも、近ごろ評判されているそうです。

「ごぞんじなかったのですか美濃さま、あなたの姪御は、『沖の石の讃岐』とも愛称されておいでですのよ」

それが癖の、皮肉っぽい口ぶりで教えてくれたのは、昔の朋輩の新少将どのでした。

わたくしが宮仕えにあがってまもなく、ご主人の待賢門院璋子中宮は飾りをおろされ、『真如法』の法名に変られましたが、翌々年の久安元年八月、四十五歳を一期に他界あそばしました。

そのときの悲しみ……。

思い出すたびに、いまなお胸がひき絞られるようでございます。

ご落飾あそばしてからは三条高倉の御所にこもって、もっぱら仏事に専念される毎日でしたけれども、ご一代のあいだに、塔を数カ所、仏堂や寺院も幾カ寺か建立なされました。

うちの一つ、法金剛院へ、わたくしは祥月命日には欠かさず参って、亡き中宮のご冥福をお祈りすることにしているのですが、人の心は同じとみえますね。

ちりぢりになった女房たちが、やはり女院のご命日に同じ寺に参りつどうて、顔を合せるおりがよくございました。

新少将ノ君にお目にかかり、姪の噂を聞きましたのも法金剛院でのことでした。

「沖の石の讃岐とは、また、どうして？」

わたくしの問いかけに、新少将どのは一首の歌で答えました。

わが袖は汐干に見えぬ沖の石の
人こそ知らね乾くまもなし

「讃岐の作ですか？」

「ええ。この秀歌がもてはやされて、姪御さまは『沖の石の讃岐』と呼ばれるようになりましたの」

「あの娘が……」

うれしくもあり、正直すこし、恥かしくもございました。それというのも、わたくしは生来の不調法者で、からきし歌というものが詠めません。

美濃というのは、宮仕えしていたころのわたくしの女房名で、早死した夫が美濃ノ介であったところから付けられた名ですが、まだお達者だった時分、待賢門院さまもしばしば腑

に落ちかねるおもものもちで、
「訝しいね。美濃はなぜ歌が不得手なのであろう。家には代々、文雅の血が流れているし、兄の頼政は、まして名だたる歌詠みではないか」
と仰せられたものでした。
われながらわたくし自身、ふしぎでならないのですが、いくら案じても事柄が三十一文字にまとまらず、まして即興のやりとりなど思いもよりません。
伺候の公卿、殿上人を相手に、巧みに歌の応酬をする朋輩たちにまじって、いつも小さくなっていたものです。
また、めざましいばかり女院のおそばには、歌人のほまれ高い才媛が集まっておりました。

長からむ心も知らず黒髪の
乱れて今朝は物をこそ思へ

ごぞんじでございましょう、この歌……。
詠み手の堀河どのも朋輩の一人ですし、安芸どのや加賀どのなども、いずれ劣らぬ上手でした。
加賀どのが、世に『伏柴の加賀』と呼ばれたのは、

かねてより思ひしことぞ伏柴の
　伐るばかりなる歎きせむとは

という優にやさしい一首をものしたからでございます。

新少将ノ君だってむろん、なだかい俊恵法印の妹さまですもの、達者に歌を詠みました。

讃岐の評判をわたくしの耳に入れてくださったのも、

（姪に引きかえて、叔母のあなたのだらしないこと……）

と、叱るおつもりがあったからかもしれません。でも、新少将どのはつづけて、

「和泉式部の作に、そっくりな歌がございますよ」

とも言うのです。

「わが袖は水の下なる石なれや、人に知られで乾くまもなし、というのですけれど、水の下の石が、汐干に見えぬ沖の石になっただけで、つまり讃岐ノ御のお歌は本歌取りですわね」

これでは褒めたのか、けなしたのかわかりません。

本歌取りというのは和歌の手法にはよくあることですし、較べるまでもなくこの歌の場合は、和泉式部の本歌よりも讃岐の詠み口のほうがすぐれています。

ですが、下敷きがあったと聞かされるとなにやら糠よろこびさせられたようにも思えて、

わたくしはがっかりいたしました。

はじめての宮仕え――。

そして世評にのぼり、名の上にまで冠せられた歌が、いにしえの女流の、本歌取りであったとは……。讃岐という娘の纏う、どこかうしろ暗い、秘密めかした雰囲気が、踏み出しの一歩から早くも象徴されているように思えて、わたくしの気持は翳ったのでございます。

わたくしには兄、讃岐には父にあたる頼政どのは、このことをどう受け止めておられるでしょうか。

武人である半面、世間に許された歌詠みでもある兄ですから和泉式部の歌を知らぬことはございますまい。

娘に寄せられる褒め言葉を、内心、面映ゆく聞いているか、それとも、

（頼政の子なら歌で名を成して当然……）

と、うそぶいているか、どちらともわたくしにはわかりかねます。

父娘だけに、どこか讃岐に似て、兄という人には理解の届きかねるところがございました。

若いころ、鵺とやらいう怪物を射落とした話。石切りの御剣の話。菖蒲ノ前との恋の話など、当の本人の生存中からはやくも伝説めいた逸話が幾つとなく世上に流布していて、しかもそのどれもが、まことしやかに語り交されているにかかわらず、どこか信じがたい、妖気

じみた暗さ、胡乱さに付きまとわれているのです。

頼政鵺退治の武勇譚……。事のついでにお話してみましょうか。

武者の家の慣いとはいえ位階は低く、昇進も思うにまかせず、むろん院の昇殿、内の昇殿ともに許されぬ不遇を、兄は鬱々と喞ってはいます。

でも、歌道に名を得た一徳でしょうか。歌仲間のつき合いとしては身分を越えて、大臣摂籙の第邸にも出入りし、歌筵の末座につらなることはできましたし、また、きまじめそうな打ち見のわりに艶聞にもめぐまれておりました。

わが一族を持ちあげるつもりはありませんけれども、摂津源氏には美男美女が多く、兄の頼政もなかなかに人好きのする、苦み走った風貌の持ちぬしでした。

門葉、郎従としてつき従う渡辺党のめんめんにも、目鼻だちのきりりとした侍が少くなく、禁中の警固に詰めても、平家武者などにくらべてはるかに容儀が立ちまさって見えるのです。

兄の身辺に、ひそやかながら女の香りが、絶えずただよっていたとしてもあやしむにはあたりませんが、末子の讃岐のほかに娘ふたり、男児は長男の仲綱以下、養子まで加えれば十人に及ぶ子持ちのうち、実の子らの母が一人一人違うというだけでも、通う相手がどれほどあちこちにいたか、お察しいただけるとぞんじます。

歌人として認められ、女との関りもそれなりに華やかなら、いますこし打ちとけた、にこやかな物ごし態度を身につけてよさそうなものですのに、家長として昼間見せる兄の顔は、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton